跡見学園女子大学
観光コミュニティ学部教授　　臺　純子　先生

　トラベルライティングで、何を取り上げるかは、書き手それぞれの個性や興味によりますが、応募作品は、他者に読んでもらうことを前提としているので、読み手を想定して、一番伝えたいこと、知ってほしいことは何か、それをどのような構成で、表現でまとめるのがよいか、を試行錯誤する時間が必要です。新座を歩きまわりながら、メモしたり、撮影した写真などの材料から、ああでもない、こうでもない、と並べ替えたり、入れ替えたりして、おおよその流れを作っていくことになります。
今までの作品は、何かをきっかけに目的地を決め、そこまでの経路やその途中で出会った「もの」、「人」、「こと」について、さまざまなシーンを表現していくといったロードムービー型の構成が多かったのですが、今年度の応募作品の中には、ある光景を額縁で切り取り、その絵の中に自分も入り込むと同時に、その光景を眺めている自分もいる、といった、二重構造の視点を感じさせる作品などもあり、ベラスケスの「ラス・メニーナス」を思い出させてくれました。といっても、重厚な宮廷画家のタッチではなく、印象派のパステル画や水彩画を思わせる光景描写で、写真やムービーとは違う時空間が展開されていて、トラベルライティングの可能性が広がったと感じています。

十文字学園女子大学
教育人文学部教授　　小林　実　先生

　先日久しぶりに平林寺の境内を訪れて気づいたことがあります。秋の紅葉シーズンだったので、散策路のいたるところにモミジが色づき、更にその奥に目を凝らすと松の木が隆々と枝を伸ばしている。つまり、秋はモミジ、冬には松を鑑賞するように設計されているのです。新座といえば雑木林という固定概念のせいか、平林寺も雑木林を堪能する場所のように錯覚していましたが、そしてたしかに門に入るまでの、市役所前からながめる雑木林は立派ですが、実際に散策する場所ではモミジと松。雑木林の美は明治の国木田独歩に始まりますから、平林寺がそれを意識するはずはないのに、新座で生活している私たちは、なぜかそこに気づかない。いや、それをとがめているのではなく、「新座といえば雑木林」と刷り込まれていることが現実を凌駕しているというのが、新座にくらす我々のリアルで

あると、改めて気づいた次第なのです。
　そうしたリアルを分け入っていった先に見える、一人ひとりの生活の一コマを読みたいというのが、この企画に対する私の期待です。そうでなければただの観光案内でしかないわけで、わざわざ学生たちが書くまでもないのですから。
　その意味では、今回の受賞作品も期待を裏切らない佳作ぞろいだったかと思います。新座駅で見かける学生たちは、こんなこと考えてるのかとか、こんなことしてたのかとか、そんなふうに読ませていただきました。

立教大学
観光学部兼任講師　　抜井 ゆかり　先生

　当校では、トラベルライティングアワード新座賞の作品執筆の前に、新座市シティプロモーション課職員をゲストスピーカーに迎え、「新座市の観光の取り組み」という講義を行っています。その講義を受講することで、新座市へ関心を持ち、作品執筆のために市内の様々な場所へ実際に出掛け、作品作りに取り組む学生が新型コロナ明け以降、非常に多くなっており、トラベルライティングを意識した上で実際に足を運んでみると、記憶で辿って執筆するよりも臨場感のある場面を描くことが出来ている作品が増えているように思います。
　また、ただ単に「きれい」「美しい」「楽しい」という感情のみならず、なぜそこに出掛けるに至ったのか、など、背景をしっかりと書き込んでいる作品も増え、1600 字という短い文章ながらその人にしか書けない、より重層的な内容の作品が多くなっています。
　それがよく表れているのが、本年の受賞作でした。和歌を巧みに取り入れ、余韻のある文章となっている最優秀賞、筆者のパーソナリティが手に取るように伝わる描写力の優れた優秀賞、留学生の学生生活への思いを伝えるもうひとつの優秀賞、特にこれらの作品は各人の個性が読者にも読み取れる作品となりました。20 歳前後の若者が描いた新座市を、ぜひ味わっていただきたいと思います。